

多職種連携によるチーム医療の実践で 糖尿病患者・家族の療養生活を支援 ～院内での組織横断的活動を地域へ波及～

糖尿病の療養指導において、食事・運動療法はもちろん、薬物療法、血糖自己測定、フットケア、合併症検査、メンタルヘルスなど、多職種連携によるチーム医療が欠かせない。兼ねてから多職種連携による糖尿病チーム医療に取り組んできた市立大津市民病院（滋賀県大津市・439床）では、2013年にチーム名を“Team Compass”と定め、院内のみならず院外との多職種連携を推進し、地域全体で糖尿病患者さん・家族の療養生活を支援している。Team Compassの活動を通じて、糖尿病の療養指導を支えるチーム医療のあり方を紹介する。



糖尿病・内分泌内科
診療部長

いし い みち よ
石井 通予 先生



糖尿病・内分泌内科
医長

みな おか ゆう すけ
峠岡 佑典 先生



薬剤部
薬剤長

なか やま ひで お
中山 英夫 先生



薬剤部
副薬剤長

はや かわ た ろ う
早川 太郎 先生

一体感のある多職種連携で 糖尿病診療の質が向上

市立大津市民病院では、2013年に多職種連携により糖尿病診療を行っていた医療チームに、“Team Compass”と名称を定めた。その背景について、糖尿病・内分泌内科診療部長の石井通予先生は、「約30年前に糖尿病のチーム医療を始めた当初は、医師、看護師、薬剤師などによる限られた職種の少人数のチームでした。その後、チーム医療の輪が広がり、管理栄養士や理学療法士、臨床検査技師、公認心理師、歯科衛生士、事務職員など多岐にわたるスタッフが糖尿病診療に関わるようになり、チームとして同じ目的を持ち活動ができるよう、一体感を高めるためにチーム名を定めることにしました」と説明する。

現在のTeam Compassの主な活動は、院内においては、糖尿病の入院患者

さんや外来患者さんを対象にした糖尿病チームミーティング(月1回)、チーム回診(週1回)、糖尿病教育入院(5日間プログラム;月1回)、糖尿病透析予防指導、フットケア外来、糖尿病療養相談外来などを実施。また、地域においては、市立大津市民病院大学公開講座『糖尿病110番』や大津市の保健師と協働による糖尿病出前講座、大津市主催のおおつ健康フェスティバル、患者会主催の滋賀県糖尿病協会患者会ウォークラリーへの参加など多岐に渡る。これらの取り組みを行うことで、チーム内の結束もより強まり、糖尿病の療養指導への貢献をめざした活動の成果が着実に現れているという。

また、併存疾患として糖尿病を罹患している患者さんが、院内の各病棟に入院していることを考慮し、「Team Compassが各病棟において解決すべき課題のある糖尿病合併患者についての情報を、主

治医や病棟看護師・薬剤師とともに共有し、糖尿病の療養指導のより良い方向性を検討する組織横断的なチーム回診を始めることにしました」と糖尿病・内分泌内科医長の峠岡佑典先生は話す。その結果、糖尿病患者さんは、どの病棟に入院しても、適切なサポートを受けることが可能となり、良好な血糖コントロールを保ちながら退院することが可能となっている。

また、退院後も、糖尿病透析予防指導や糖尿病療養相談外来など、多職種連携による充実した外来指導體制は、血糖コントロールの維持に繋がっており(図1)、石井先生は「医師とともに多くの専門職にサポートされていると実感することで、患者さんが前向きに糖尿病療養に取り組むようになったからではないか」とチーム医療における患者さんへの貢献を示唆した。

CDE/LCDE薬剤師を中心に 糖尿病薬物療法の 安全性・有効性に寄与

このような中、薬剤師は糖尿病チーム医療が始まった当初より積極的に関わり、安全かつ有効な糖尿病の薬物治療を推進している。薬剤部薬剤長の中山英夫先生は「医療安全については、ヒューマンエラーを最小限に抑えることを目的に、薬剤部で様々な取り組みを行っています」と話す。その一つとして2014年から、医薬品に表示されたバーコードを利用して医薬品の取り違えをチェックする調剤過誤防止システムを構築・稼働させている。「例えば糖尿病の治療には、作用機序の異なる薬剤や、配合薬、後発医薬品など、様々な薬剤が処方され、腎機能等の確認が必要な薬剤も含まれています。そのため、医薬品の取り違えや投与量の間違いなどヒューマンエラーが起こりやすいのですが、システム稼働後の調剤過誤はほぼゼロになっています」と中山先生。

こうした薬剤部の医療安全対策に加え、Team Compassでは、糖尿病チーム医療に携わって18年、日本/滋賀県糖尿病療養指導士(以下、CDE/LCDEと記載)の資格を有する薬剤部副薬剤長の早川太郎先生を中心にLCDE有資格の薬剤師らが活躍している。峠岡先生によれば、薬剤師は、CDE/LCDEの取得をきっかけに、患者さんの生活背景を加味した服薬指導や治療薬の調整を行うとともに、療養相談やセルフケア、エンパワーメントにも深く関わるようになって来ているとのこと。

また、チームミーティングやチーム回

診では、がんや炎症性疾患などの治療目的で入院してきた患者さんのうち、高血糖や血糖値が上昇するような治療が予定されていれば、抗がん剤レジメンやステロイド投与時期など主科の薬物療法の情報を糖尿病専門医に提供し、適切な治療方針が決定できるようにサポートしている。石井先生は、「入院患者さんの病態が複雑化している昨今、組織横断的に治療内容を熟知し、絶食時期や退院後に自宅でインスリン注射を続けられるのかなど、薬剤師からの患者情報なしに、糖尿病の治療方針を決めることはできません」と評価する。

こうしたことを踏まえ、中山先生は「薬剤部では各病棟の薬剤師に糖尿病の知識を深めてもらうため、LCDEの資格取得をサポートしています」と付け加えた。現在、同院には早川先生を含めLCDE有資格の薬剤師が5名在籍している。こうした薬剤師が糖尿病チーム医療で専門性を発揮するとともに、バーコード認証による調剤過誤防止システムの稼働などが相乗効果を生み、2014年以降、インスリンエラーが大きく減っている(図2)。さらに、CDE/LCDEの活動を促進し、モチベーションを維持・向上させる目的で、2018年に病院組織委員会としてCDE/LCDE有資格者の看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師を主軸とした『CDE委員会』を石井先生の主導で設立した。現在、同委員会は、さらなるインスリンエラーの低減をはじめ糖尿病関連のインシデント防止をめざした取り組みに着手している。

LCDE薬剤師育成と薬薬連携で 地域の糖尿病診療への貢献めざす

「院内ではTeam Compassという糖尿病チーム医療の基盤が、糖尿病診療の底上げに貢献したと考えています。今後は、院内の成果を地域に波及させていきます」と意気込む石井先生。現在、同院内科に通院している糖尿病患者さんは約1,400名であり、退院後、かかりつけ医に逆紹介した患者さんも少なくない。糖尿病診療は薬物療法が大きなウエイトを占めることを考慮すれば、地域での多職種連携、中でも薬薬連携による糖尿病診療の底上げは喫緊の課題といえる。

これまでも地域の保険薬局薬剤師を対象に糖尿病出前講座を開催してきたが、2017年からは病薬連携セミナーを年1回のペースで開始し、石井先生、峠岡先生、早川先生などが講師となり、糖尿病の最新的话题をテーマに講演を行っており、滋賀県全域から多くの保険薬局薬剤師が参加し知見を深めている。中山先生は、「病薬連携セミナーを定期的実施することで、顔の見える関係を構築するとともに、一人でも多くの保険薬局薬剤師が糖尿病診療に興味を持ち、LCDEの取得をめざしてもらえるように頑張りたい」と話す。

大津エリアのLCDEは2019年4月1日現在で175名、うち薬剤師は16名で、その中の5名が同院薬剤師。地域のLCDE薬剤師はまだまだ少ないが、今後、Team Compassの牽引によりLCDE薬剤師同士の薬薬連携システムが構築すれば、地域の糖尿病診療の質は確実に向上するだろう。

図1 多職種チーム介入による血糖コントロール

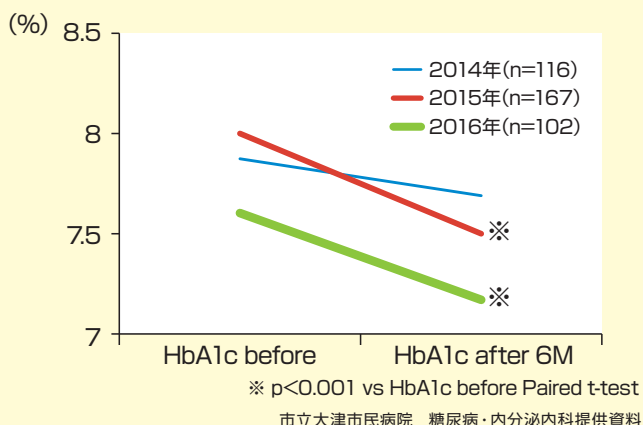


図2 インスリンエラーの減少

